ドイツ、テュービンゲンにおける口承文芸研究

―バウジンガーの「日常の語り」―

間宮史子

テュービンゲン大学のルートヴィヒ・ウーラント経験文化学研究所は、ドイツ南西部バーデン・ヴュルテンベルク州にある。ヘルマン・バウジンガー(Hermann Bausinger)は、一九六〇年以来三〇年余りにわたって、その研究所長として、民俗学(Volkskunde)から出発して発展した「経験文化学」(Empirische Kulturwissenschaft)を率いてきた。口承文芸研究の分野においても多くの業績があり、特に「日常の語り」あるいは「日常の話」[1]については、早くから研究対象として注目し、このあいまいなジャンルを精確に規定しようと論考を発表してきている。バウジンガーは、一九九一年秋に定年退官したが、ちょうどその一年前の一九九〇年秋より、私はテュービンゲン大学の経験文化学科に留学する機会に恵まれた。そこで本稿では、まず「経験文化学」とはなにかを簡単に述べたうえで、バウジンガーの「日常の語り」についての論考を紹介しようと思う。その際、私が参加したバウジンガーの「はなし」のゼミナールについてもあわせて報告する。

一、テュービンゲン大学における経験文化学

経験文化学研究所の前身であるルートヴィヒ・ウーラント民俗学研究所は、一九三三年に創立された。一九六〇年代になると、学問の近代化とともに、「フォルク」(Volk)ということばの見直しがされる。[2]一九六〇年代の終わりから、ドイツ民俗学会で、これからの民俗学はどうあるべきかという問題が討論され、一九七〇年、学会で新しい「民俗学」の定義がされると、テュービンゲン大学ではその学科の名称を、民俗学から経験文化学に改めた。[3]その際、「文化社会学」という名称も討議されたが、同じ学部に社会学科が存在するので、これはとりやめになった。[4]現在、ドイツ語圏の大学で「経験文化学」科があるのは、テュービンゲンだけである。

経験文化学は、社会科学的方法を用いて、現代の文化的諸現象を研究し、分析と解釈をおこなう。その目的は、社会文化的な諸問題、諸現象を解明し解決するのに寄与することである。研究対象は、現代社会における一般大衆の文化と生き方で、日常の観点を強調する。文化の精神複合体を明らかにするために、①データの統計的処理、②観察、③テクスト分析、④歴史的観点による補足、⑤政策科学的問題提起、が必要になる。社会科学としての経験文化学は、社会・行動科学部に属し、ドイツ文学、歴史学と密接な関係をもち、芸術史、民族学とも関連がある。

二、バウジンガーのいう「日常の語り」

バウジンガーは、一九五二年にテュービンゲン大学に博士論文として提出した『生きている語り―ヴュルテンベルク北東部において の調査に基づいた口承文芸の生命に関する研究』[5]において、現代も「生きている語り」の意味、形態、条件、原動力を考察した。そして、昔話、伝説、笑い話などの伝統的な語りの形式が、マスメディアによる変形を受けるとともに、それらと並んで、一定の形式を持たない話（幸せなできごと、前代未聞のできごと、愉快なできごとを語る話）が存在することを認めた。この論をさらに進めたのが、一九五八年に発表された「日常の語りの構造」[6]である。この論文については、邦訳がすでにあるので、ここでは詳述しないが、バウジンガーはこの論文で初めて「日常の語り」という術語を用いた。その後、『昔話百科事典』の「日常の語り」の項目[7]を執筆しているが、そこではおおよそ次のようなことを述べている。（「　」内は引用）

「『日常の語り』とは、対比あるいは補完概念である。これは、従来の民俗学的な収集・研究活動においてつくりだされた、民間説話という術語では覆いきれない話の一領域を開拓するもの」であり、特に伝統的なジャンルの話が減少している場所にみられる。そのような話は、実は昔から存在した。十六世紀の笑話集には、後に「新聞伝説」と名づけられたり、実際の事件に基づいた当時のセンセーショナルな報告が、愉快な話に混じって載せられていた。パウル・ネド（Paul Nedo）は、「うた、伝説、昔話、笑い話が、特有の高尚な語りの場に属していたのに対し、一般的な語りの欲求は、生活に由来する報告や話で満たされていた」と述べている。しかし、そのような話は、研究者がその存在〔たとえば、旅の話、実話、思い出話、兵隊や戦争体験の話など〕に気づいていたにもかかわらず、従来の口承文芸研究では光をあてられることなく、研究対象から除外されてきた。伝統的なジャンルが、広い意味での現実的な話にとってかわられることは、比較的小規模ながら昔からあったことで、そこへの立ち入りがふさがれていただけなのである。その原因として、第一に、昔話や伝説に古い時代の神話的な要素が保存されているとみる、神話学的関心が基準となっていたこと、二番目には、伝統的なジャンル〔特に昔話〕がそなえている芸術的な条件への興味があげられる。

「ここで、日常の語りをより正確に特定してみると、日常の話は、一方で、経験や体験という非常に個人的な領域を話題にするが、他方、昔話や伝説におけるよりも、集団の『予防検閲』（ボガティリョフ／ヤコブソン、一九二九年）がはたらくので、その内容は現実的である」。日常の話の伝承期間は、一部のものでは、かなり短いといえる。たとえば「仕事の思い出」は、その仕事が理解されうる決まった社会的範囲でのみ伝承され、その範囲外では、例として理解できても、長く豊かな伝承は期待できない。農業やその他の単純な職業分野に由来するできごとや体験の話には、あまり複雑でない構造とそれゆえの語りやすさを確かめることができる。日常の話のほ

かのタイプとしては、家族の思い出、患者の話、旅の報告、戦争あるいは兵役体験がある。「このような名称は、話の機能の違いを部分的には示しているものの、概してその内容で決められている。共通しているのは、これらの話が、現実の一場面を切りとり、その具体性でもって『事実性』の特定の一領域を信じられるようにすることである。このことは、アンドレ・ヨレス(André Jolles)のいう『思い出話』(Memorabile)に対応する」。

「日常の語りの領域については、『はなし』(Geschichte)や『ヴィッツ(一口話)』(Witz)という、今日まだ生きているジャンルの名称が、条件つきで適用され、会話から成立するような話は、むしろ何の名称も与えられないままであるのが特徴的である。そこで、古典的なジャンルの術語のみならず、一般に使われている用語を見直して、さまざまに組み立てられた話の新しい分類整理の試みが必要になってくる」。その際、テクスト言語学やコミュニケーション科学の方法が、口承文芸研究にも助けになるだろう。

以上が、バウジンガーの考える「日常の語り」であるが、それでは、現在のドイツ口承文芸研究のなかで、日常の語りないし日常の話は、どのように位置づけられているのだろうか。

三、ドイツ口承文芸研究における「日常の語り」の位置

ルッツ・レーリヒ(Lutz Röhrich)は、『民俗学概論』の各論「口承文芸研究」のなかで、「現在の口承文芸研究のもうひとつの流れは、あまり伝統的でない、現代の語りの形式へ向かった。すなわち、日常の話、仕事の思い出、旅の報告、病気の体験、入院の思い出、家族の思い出話、とりわけ、自伝的な話、そしてまた、ヴィッツ…である」[8]と述べている。「日常の語り」という術語は、バウジンガーが口承文芸研究に導入し(一九五八年)、それ以後ドイツでも、グループや個人の日常世界の研究にオーラルヒストリーの方法が多く用いられるようになった。一九七〇年代の終わりから、口で伝えられたあるいは文字で書かれた「人生の思い出」やその他の自伝的な語りの原典についての、調査や分析の方法論的な問題が、いっそう批判的に取り扱われるようになる。レーリヒはここで、アルブレヒト・レーマン(Albrecht Lehmann)による、大都市生活者のライフヒストリーの研究をあげ、自伝的な記録もまた、伝承された価値観や規範を反映していることを指摘している。そして、このような口承文芸研究は、結局は個人的、集合的意識の研究となり、語らない現象や、それによって引き起こされる世代間のコミュニケーション阻害についても取り扱われるという。[9]

ヘルガ・ゲルント(Helga Gerndt)もまた、その著『民俗学概論』の「口頭伝承」の項で、日常の語りへ研究の視点が移行したことに触れ、バウジンガーのいう、従来のジャンル分類に対する対比・補完概念としての「日常の語り」の実際が、大きな拡がりを見せていると述べている。その心理的社会的な機能が、コミュニケーションの実態の範囲内で視野に入れられ、また、個人的な体験話が、集合的に伝承されてきた語りの型に従って類型化、体系化されることに

注目している。[10]

このように、バウジンガーに端を発した「日常の語り」は、現代のドイツ口承文芸研究のなかで、ひとつの大きな研究の流れになっていることがわかる。

四、バウジンガーの「はなし」ゼミナール

一九九一～九二年の冬学期に、バウジンガーは、テュービンゲン大学の経験文化学科で、「はなし―日常の話の形式と機能」(Geschichten—Formen und Funktionen der Alltagserzählung)というゼミナールを持った。このゼミナールについて、私は以前、留学中のテュービンゲンから、会報『伝え』に短い報告を寄せたことがあるが、[11]そのときゼミナールはまだ継続中だった。そこでここでは、当時の「はなし」のゼミナールについて、もう少し詳しく述べてみたい。

当時の社会・行動科学部の冬学期用講義内容に、バウジンガーが載せた「はなし」のゼミナールの内容と目的は、次のようなものだった。

「民俗学的な口承文芸研究はもっぱら、昔話、伝説、聖者伝説といった、伝統的で半ば文学的な語りの形式を研究してきた。それより平凡で日常的な語りは、顧みられないままだった。現実にはしかし、今日まで、あらゆる種類の『はなし』が、大きな位置を占めているのである。(中略)このゼミナールでは、このまとまりのない日常の話の領域を構成することを試み、その優勢な『ジャンル』を問い、またその様式、構造、社会的な機能を問題にする」

ゼミナールの初回でバウジンガーは、「はなし」とはそもそもなにか、ということを問題にするのだと言った。人は「できごと」を語る。「できごと」とは、普通の日常の経過を注目すべきやり方でさえぎり、その異常さによって注意をひき、あらわれる事柄である。

ところで、はなしを意味するドイツ語 Geschichte には、二つの意味がある。ラテン語の historia (歴史、できごと) と fabula (話)の意味である。historia は真実と関わりがあり、fabula は、語られたこと体験されたことで、虚構の形式、口で伝えられた文芸形式を持つ。この二つをドイツ語では区別せず、同じ Geschichte ということばであらわす。

昔話、伝説、聖者伝説、笑い話などは、集合的な思考を映し、時間に拘束されず、伝統的で公のものである。それに対し、日常の語り、つまり日常語られる「はなし」は、かなり強く個別化していて、公のものではない。バウジンガーの問題意識の出発点となっているのは、昔話、伝説などが記録され、なぜ日常の語りが記録されなかったのか、ということである。それは、グリム兄弟に始まるドイツ民俗学の歴史に帰すことができる。すなわち、グリム兄弟と同時代のロマン派文学者や神話学者は、昔話、伝説、民俗習慣に、ゲルマン神話の遺産が含まれていると考え、これらの中に時間を超えた古い伝承を見つけようとした。そしてこれが、グリム以降の民俗学者の学問的関心となったのである。

日常の話がどのように語られるのか、そのテーマや現代社会におけるその機能を問うということで、ゼミナールでは、次のようなさまざまなテーマがとり扱われた。

①会話と話―会話における話。人がその話とつながりを持てるように、話は現実性を持つ必要がある。

②絵と話―子どもの絵は絵物語である。子どもは、伝える価値のあるもの、伝えるプロセスを描く。

③子どもの語り―大人と子どもでは、話のモティーフや語り方に違いがある。

④受容としての語り―話の相互作用的な機能、社会の葛藤における形式と手段としての共通の語り、世代間の語り。

⑤おしゃべり―自明の文化的実践であり、女性的なコミュミケーションの形態を持つ。できごとを再構成するジャンル。複合社会の構造及び機能と多くの社会的関連を持つ。

⑥センセーショナルな話（現代の伝説、都市伝説）―その一時的な機能（真実、テクストからの独立）、コンテクスト（現実の状況）の重要性。

⑦うわさ話―その成立と拡がり、機能、流布システムなど。

⑧ヴィッツ（一口話）

⑨国境話（前東西ドイツ国境地帯での話）―二つのドイツの間の国境は、独自の文化的形態を引き起こしたことが確認される。

⑩女性の話、男性の話―性による話の違いではなく、話し方の違いが扱われた。

⑪旅の報告

⑫裁判の審理での話し方―裁判官、弁護人、検事、被告人、証人の話し方の戦略。

⑬伝記的な語り―個別化、機能としてのアイデンティティ、聞き手の重要さ、自己確認の必要性、話にするプロセスなど。日常の話は、伝記的な断片である。

⑭患者の話―回診時の入院患者の話を、医師たちがどのように阻止するか。

⑮現代における昔話の語り―昔話を語ることの価値の再発見、現代の語り手。

⑯逸話とそのオリジナル―逸話（ある個人、ある社会層、ある時代の特徴についての短く機知にとんだ話）は、ほかの日常の話（たとえ話、笑い話、ヴィッツ）との境界があいまいで、たやすく移行しうる。

これらのテーマを通して、「日常の語り」について明らかになったことを、最終回にバウジンガーは、歴史的観点、構造と意味、機能の三点からまとめた。

まず、歴史的観点からすると、伝統的な語りは、決まった機会に、長く集中して行われ、決まったジャンル（昔話、伝説、聖者伝説など）が語られる。さらに、規則的に仕事の際に語られたり、職業的な語り手の存在をあげることもできる。これに対して「現代の」語りは、何かのついでで、どちらかというと短くすばやく、変わったことを含む日常的なはなしが語られる。そして、現代における語り

の再生の傾向として、ゆっくり話すことの発見、世界的規模での話の受容、芸術あるいはセラピーとしての語りをあげることができる。

構造と意味について。語る(erzählen)というのは、報告する(berichten)、伝える(mitteilen)、歓談する(sich unterhalten)とは異なる。「日常の語り」の基本的特徴は、虚構性である。真実か、真実でないかが問われるが、重要なのは「真実」であることである。その基本形式（ひとつの話を成立させる伝達機能の順序）は、提示（方向づけ）、複雑化、解決、評価、終結部である。[12] 機能は、内容の伝達であるが、その背景にある機能として、自己確認、自己表現、連帯感、知識のネットワークの作成があげられる。

五、付随の芸術

現代では語りが付随的になされる、ということに関して、バウジンガーは「付随の芸術」という論文[13]を発表している。そこでは、話が語られるその仕方全体をコンテクストととらえ、現代の忙しいコミュミケーションのなかへ、話は目だたないように、ついでにとり込まれると述べる。以下にその内容をまとめてみる。（「　」内は引用）

もはやはなしは語られていない、といわれて久しい。この説が、一世紀以上ものあいだ、口承文芸の収集者を鼓舞した。彼らは、人間の語るという能力が滅びようとしており、その最後の跡をたどっていると信じていた。このノスタルジックな考えを否定することから、最近の口承文芸研究は出発した。こうして、従来顧みられなかった「はなし」が視野に入れられたのである。「日常のはなし」は、伝統的なジャンルと確かに似てはいるが、「別のカテゴリーに入れられなければならない。しかし、この規定だけでは不十分である」。

「そこでここでは、語られ方から『日常のはなし』を規定してみようと思う。コンテクストの領域、パフォーマンスの問題へのより広範な視点が、研究分野の広がりとしてだけでなく、語りの研究に含められるものとして理解されるべきだと思う」。話とコンテクストとの関係は、従来の口承文芸研究には欠けていた視点である。というのは、研究が話それ自体、とりわけその内容に集中していたからである。そして、コンテクストやパフォーマンスの構造が問われたとしても、かつての語りの場のみが重視されて、それ以上は問題にならなかったのだ。

「日常的な語りは目だたないので、見すごされがちだが、その目だたないこと自体がそのような話の様式に属している」。例として、言語学者が「会話的な話」と名づけた話をあげよう。これは、会話のなかに組み込まれ、会話から生まれる話である。「このような話がついでにされることは、事実というだけではなく、規範でもある」。そして、「会話の最中に話をする良い機会を作るために、戦術、様式的なトリックが存在する」。

話の方向が多様なので、付随的な話の文法といったものは体系的には発展しない。しかし、比較的よくあらわれる形態は、次の四つ

である。

現実化(Aktualisierung)、所有(Annexion)、連想(Assoziation)、弁明(Apologie)。

最初の二つは、密接に関係していて、はなしの戦略に使われる。例として、ひとりのホームレスの話をあげる。彼は、十日以内に二度、同じ話をした。それは、ある「サウナ」への警察の手入れについてで、彼はその目撃者だったと言い張った。自分は、何人かの立派な紳士が、半分裸でその店から逃げていったのを見たと。もしかしたら、この話には真実の核があるかも知れないが、そのホームレスがその場に居合わせた、それも二度も、ということは、ほとんどありえない。「けれども、彼は二度とも、自分はたった今、そこから来たところだと言った。これは、このホームレスが話を自分のものにしただけでなく、現実味を持たせて、それによって語る権利を確保したということである。現実性は、たとえそれがつけ加えられたものであっても、彼が注目されることを保証する」。

三番目の連想については、ヴィッツ（一口話）の例で説明する。「ヴィッツは、付随するものやめんどうな戦略などなくても、会話のなかへ組み込めるジャンルであるが、それでもヴィッツを簡単に言い放つ規準などない」。それで、連想による関連づけが行われる。

四番目の弁明というのは、導入形式である。人はだいたい、話をすることについて申し訳を言う。話を始めるにあたって、「あなたは（私の話を聞いている）そんな時間がありますか?」とたずねたりする。

コミュニケーション行動における変化—より多くひんぱんになされる接触、しかし、それはより表面的で一時的である—は、すでに前世紀末から指摘されている。「語るということは、このような行動形態に反してある。それは、時間、注意、のんびりした気分を要求する。それゆえ、集中的な語りの形式と、支配的で広範囲なコミュニケーションのあいだを仲介するプロセスが必要となる」。つまり、現代化された社会のコミュニケーションの様式が、語りという芸術を付随的にとり扱うのである。

以上、バウジンガーの「日常の語り」について紹介してきた。テュービンゲンは、ドイツ語圏のほかの大学、たとえばゲッティンゲン、フライブルク、インスブルックなどに比べれば、口承文芸研究に特に重点を置いているわけではない。バウジンガーの定年退官後は尚更である。

近年、日本の口承文芸研究（及び関連領域）においても、術語、資料、研究対象、方法論の再検討とあわせて、「世間話」あるいは従来の伝統的な語りのジャンルにはおさまらない「はなし」に光があてられている。この報告が、何かの参考になれば幸いである。

注

(1) バウジンガーの「日常の語り」(alltägliches Erzählen) 及び「日常の話」(Alltagserzählung)が、日本の術語「世間話」に対応することについては、私も異論はない。しかし、本稿で紹介す

るように、バウジンガーはその術語に、かなり広範囲にわたる「はなし」を含めているので、ここではあえて「世間話」とせず、「日常の語り」あるいは「日常の話」とした。

(2) ドイツ語の Volk には、社会的な意味(民衆)と民族的な意味(民族)があるため、その概念は社会情勢によって変化した。「民族」は政治的なことばで、国家社会主義の時代、ナチスのイデオロギーに近いものとして、統治戦略に使用された。

(3) この詳しいいきさつについては、坂井洲二『ドイツ民俗紀行』一九八二年、法政大学出版局、一三三～一四七頁参照。

(4) 一九九一年一〇月三一日に、研究所の研究会でおこなわれたバウジンガーの講演「私は当時、経験文化学になにを期待したか?」による。

(5) Bausinger, Hermann: Lebendiges Erzählen. Studien über das Leben volkstümlichen Erzählgutes auf Grund von Untersuchungen im nordöstlichen Württemberg. Diss. Tübingen 1952.

(6) Bausinger, Hermann: Strukturen des alltäglichen Erzählens. In: Fabula. Zeitschrift für Erzählforschung. Band 1. hg. v. Kurt Ranke. Berlin 1958. S. 239-254. (邦訳「世間話の構造」竹原威滋訳、アラン・ダンデス他『フォークロアの理論』荒木博之編訳、一九九四年、法政大学出版局、所収。訳者による解説が付されている)

(7) Bausinger, Hermann: Alltägliches Erzählen. In: Enzyklopädie des Märchens.Band 1. hg. v. Kurt Ranke u.a. Berlin/New York 1975. S. 323-330.

(8) Röhrich, Lutz: Erzählforschung. In: Grundriss der Volkskunde. hg. v. Rolf W. Brednich. Berlin 1988. S. 354.

(9) 同右書、S.373f.

(10) Gerndt, Helga: Studienskript Volkskunde. München 1990.S. 102f.

(11) 「外国通信　ドイツのテュービンゲンから」　会報『伝え』第一〇号、一九九二年、日本口承文芸学会。

(12) Bausinger, Hermann: Erzählforschung. In: Enzyklopädie des Märchens. Band 4. Berlin/New York 1984. S. 342-348. にも指摘されている。

(13) Bausinger, Hermann: Die Kunst der Beiläufigkeit. In: Fabula. Band 32. Berlin/New York 1991. S. 4-9.

(まみや・ふみこ／白百合女子大学非常勤講師)